

## 葉集を読む

松岡 隆子

嵌め殺し窓とふ窓や冬怒濤

安達みわ子

「嵌め殺し窓」とはガラスを窓枠にはめ込んだ窓のことで、採光や眺望が目的であり開閉が出来ない。同時作の〈夕暮れの冬、濤迫るカフェの窓〉から、嵌め殺し窓があるのは海辺のカフェであることが分かる。窓の向こうに広がる海は日本海であろう。冬の日本海は暗く、寄せ来る波は怒濤となつて礁に砕ける。「嵌め殺し」という強烈な語感と冬怒濤の勢いが響き合つて効果的だ。

皺の手に子どもが触れる聖夜かな

宮当 信行

鳥声の四方八方冬木宿

鈴木 富代

ふつくらとした幼子の手の温もりが私自身の皺の手にも伝わってくる感じがする。皺の手は作者の手かもしれないが、子どもに寄り添つて絵本を読んでやっている祖母の手のようにも思える。読者はいつの間にか聖夜の安らぎの世界に導かれていく。どこからか「きよしこの夜」のメロデーが流れてくる。

知らぬ間の手きぎ足きぎ年の暮

三宅まどか

追ひこされ追ひこされて十二月

見上 恵

年も詰まってくるとあれもこれもと気が急ぐ。大掃除や新年を迎える準備など、やらなければならぬことがまだいろいろとある。普段の何倍も働くので手は荒れ放題となる。知らぬ間の〈手きぎ足きぎ〉を摩りながら、健気に働くわが身を愛おしく思っている。年の暮の実感が自愛の一句となつた。

十二月は一年の最後の月であり歳末の慌ただしさは格別である。街を行く人々はみなせかせかと急ぎ足で歩く。最近少し足の衰えを感じている作者は、次々と追い越していく人々を見やりながら、焦らず急がず自分のペースで歩いて行く。〈追ひこされ追ひこされて〉に一抹の淋しさも感じられる

が、身に添った歩みを良しとしている見上さんにエールをおくりたい。

自転車の母子揃ひのイヤーマフ 西島 美晴

揃ひのイヤーマフをして北風のなかを颯爽と自転車で駆け抜ける母と子の姿が目につかぶ。子どもは小学生か中学生くらい少女であろうか。とするとイヤーマフはピンクやアイボリーなどの明るい色合いかもしれない。イヤーマフは「耳袋」の傍題で歳時記には「すっぽりと耳だけ覆うものと、耳頬、顎全部を覆うものがある」と解説されている。最近は何だか耳だけ覆うものも含めてイヤーマフと言っているようだ。手持ちの歳時記にはイヤーマフの例句は見られないが、そのうち増えてくるだろう。

すみずみを掃納して集会所 野尻 敏子

集会所は公民館と違って一定の地域の住民のための施設であり、自治会の集まりやサークル活動などに気軽に利用されている。運営に地域の人達が関わっているところも多く、年末には利用者たちが寄り合ってみんなで大掃除をする。また来年も皆が気持ちよく使えるようにと隅々まで丁寧に掃き清める。地域の人たちに大事にされている集会所である。

賀状書く思ひ出す顔皆若し 大山 玲子

最近ではインターネットの普及でSNSやメールなどで新年の挨拶をする人が増えているようだが、私の周辺ではまだ年

賀状を交換し合っている人が多い。一年に一度相手の顔を思い浮かべながらメッセージを書いて送るのは心楽しいものだ。大山さんはいま幼馴染や旧友たちに年賀状を書いている。思い出す顔は誰もみな若くて懐かしい。相手から届いた年賀状を読むのは新年の楽しみでもある。「賀状書く」という季語はこれからも詠み継いでいきたい季語である。

いつの間に日向ぼこりの似合ふ顔 浅尾 泰昭

昼休みの公園などで日向ぼっこをしているサラリーマンの姿を見かけることがある。園児たちの姿も見かける。日向ぼっこは老人に限ったものではないはずだ。だが何故か老人のイメージがある。多分に高齢化社会のせいかもしれない。吟行で俳句を考える時、日向のベンチはありがたい。ベンチに座って静かに俳句を考えている姿は、他人から見ると日向ぼっこをしている老人に見えるかもしれないと気づいた浅尾さん、自分の姿を客観視することで会心の一句を得た。

その他の印象句

煮炊き終ふ厨にはかに冷えてきし 小川テル子  
極月の庭に鳩来て鴉来て 鈴木美代子  
辺りいちめん山茶花の散つてゐる 早出 誠治  
月冴えて半眼凝らす磨崖仏 小泉 恵子  
冬日差す一等席は猫の席 佐藤 陽子  
新米のおむすびの粒透きとほる 晴 涼風